

富田御殿絵図

会員 西村修一

富田御殿は、徳山毛利七代藩主就馴なりよしの隠居所である。

専之助は寛延三年（一七五〇）二月二十四日、五代藩主広豊の十男として江戸今井谷邸に生まれた。父広豊の跡を継いだ兄の六代広寛が、明和元年（一七六四）二月に江戸藩邸にて三十二歳で亡なると、広寛に嗣子がなく、他の兄は早世あるいは他家を相続していたため、急遽兄の養子となり、四月には、十四歳で第七代徳山藩主（就馴）を襲封した。

天明五年（一七八五）に藩士の文武修練場として、支藩に先駆けて勢屯せいだんに藩校鳴鳳館を創設し、あるいは藩祖就隆及び三代元次の詩文歌類を編集せしめるなど、特に文教面に意を注いだ。その徳望は、治世三十余年の間に

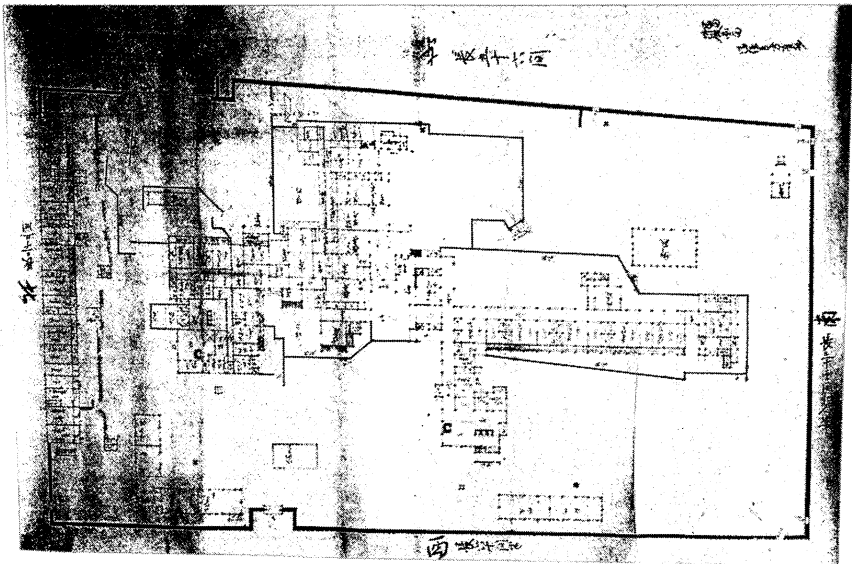
一人の重犯人を出さなかったことでも知られる。

寛政九年（一七九七）九月、四十七歳の就馴は家督を次男広鎮ひろしげに譲り、藩政からいっさい手を引く決意で、十一年（一七九九）に富田において、隠居所の築営に取り掛かった。

富田御殿の建設が完了するまでの間、富田村土井の四熊久左衛門宅・屋敷地および建暎院隠居敷地を借り上げ、仮御殿とすることにした。

仮御殿での生活は六年にわたった。その間に二人の御子が誕生したが、夭折した。

仮御殿にほど近い茶の木原の地に、かねて建立中であった富田御殿の大殿様御座所が完成し、文化元年（一



富田御殿絵図 (林 崇文氏蔵) (『新南陽市史』口絵カラー)

八〇四) 二月七日、大殿様が正式に入居された。

隠居中の出来事として、百姓らの水争いの仲裁に入り、用水路の中ほどに大石を置いて水を分けたという大岡裁きのような、「殿様石」の話が伝わっている。

富田御殿のある茶の木原は政所まさどころの北部にあたり、土井の仮御殿にほど遠くない場所である。御殿前には政所から鹿野へ至る道が南北に通っていた。

御殿の一部を移築したと伝えられる徳山の佐藤家長屋門は、かつて県総合庁舎の南辺にあったが、現在は解体保存されている。同じく富田平野の林家邸宅は、総屋久杉で張られた天井を持つ見事なもので、当時の様子をしのぶことができる。

注) 徳山の佐藤家長屋門と富田の林家邸宅のカラー写真は、周南市美術館郷土史コーナーのパソコン内で見ることができる。

就駟は文政十一年(一八二八)三月、七十九歳で死去するまでの約二四年間を富田御殿で過ごした。

富田御殿のだいたいの位置は予想できるものの、発掘

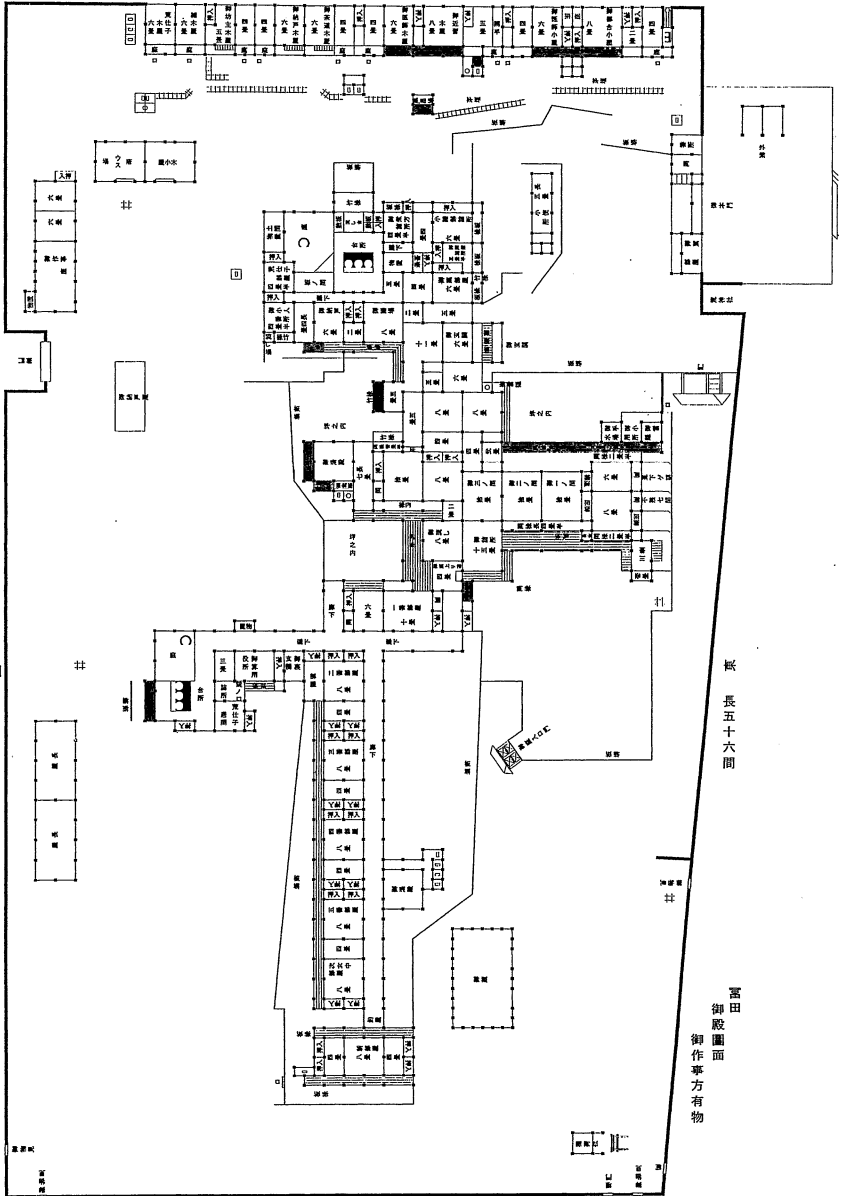


かつて毛利町にあった佐藤家長屋門 ©周南市教委



平野の林家邸宅 ©周南市美術博物館

平 峯川十回屋



長六十間半

長五十六間

宮田御殿圖面
御作事方有物

©周南市教委

調査されていないため、詳しい場所は特定されていない。

林家に伝わる富田御殿絵図のコピーを手にした私は、なんとか皆さんの前に展示できる形にしたいと考えていた。すぐに大下弘司さんと富田御殿現代語版絵図作成プロジェクトを開始した。

残念なことに、古文書の力がなくて古書体が判然としない。徳山地方郷土史研究会理事の金谷一夫さんにお願いした。中には意味不明のものがあつたが、ほとんどを金谷さんは解析された。

大下さんの後を受けた與志園愼二さんと見取り図に一枚一枚現代語を貼り付けるといふ作業をしていった。平成十七年に完成をみて、同年五月の「まどころ来てみんな祭」(富田風車通り徳本工務店)にて、A1版光沢紙仕様パネルで初お目見えさせることができた。

少し遅れて、独自に作業を進めていた大下さんは、息子さん(宣昌^{のぶまさ}さん)の協力を得て、パソコン入力されたきれいな絵図を完成させた。

周南市新南陽民俗資料展示室にて平成十七年より展示

していたが、すぐに大下版に差し替えた。

参考文献

『新南陽市史』 新南陽市 一九八五年

『徳山市史(上)』 徳山市 一九八四年

『周南風土記』 文芸社 小川 宣 二〇〇六年

『周南地方歴史物語』 瀬戸内出版 清木 素、小川 宣

他 一九八〇年

『新南陽の民話と伝説』 新南陽市教委 一九七三年